

## ロバート・ブラウニングの詩

### 「ラバイ・ベネズラ」の文学的価値について

三 谷 正

#### (一) 序

文学作品はある程度、年令により読者への訴えに差がある。シェクスピア〈William Shakespeare〉の「ロメオとジュリエット」〈Romeo and Juliet〉は若い人への訴えは大であるが「リア王」〈King Lear〉は若い頃読んでも理解し難いものである。しかし老人がこれを読めばリア王の心情が森々と胸に迫り、この劇詩の素晴らしさに心打たれるのである。ロバート・ブラウニング〈Robert Browning〉の「廢墟の恋」〈Love among the Ruins〉は若者の絶賛を得るが「ラバイ・ベネズラ」〈Rabi ben Ezra〉はこれが老令賛美の人生論的、道德論的な詩と<sup>①</sup>思われているため、若い人には魅力乏しく、また仮令<sup>なま</sup>若い頃、これを読んでも理解し難いのである。しかし老年になってこれを読めば、何となく近親感を覚え、魅力を感じるのである。トマス・ハーディ〈Thomas Hardy〉も淑死の病床にあって、夫人にこの詩の朗読を求め、眠<sup>②</sup>と注意を集中し、聴き入ったことである。けれども若者も、否、年令の如何を問わず広く一般の人も、ブラウニングがこの詩をものにしたときの心情、或はこの詩の文学作品としての根本的なものについての幾つかの問題を理解すれば、案外、訴える所があると思う。かく考えて、ここにこの詩の文学作品としての本質、特にこの詩に潜んでいる情緒を探り、知性についてはその功罪を、芸術的理性についてはその表現について考察し、この詩の文学作品としての価値を探ってみたいのである。

ロバート・ブラウニングの詩「ラバイ・ベネズラ」の文学的価値について

(二) この詩に於けるブラウニングの思想

この詩はブラウニングの人生観、宗教観を織り込んだ老令賛美の詩である。詩の冒頭に、

「老いても諦めることなく、自己を保ちて年取らんことを。

人生の最善は未だ来らず、人生に終りあるは、その始めあるがためなり。

われらの生涯はただ神の御手にあるのみ。

神は言い給う。『人の全生涯、われこれを企てり、青春は、その半ばにすぎず、神を信ぜよ、人生の全体を見よ、老いの凋落をゆめ恐ることなからんことを』<sup>⑤</sup>」

と言っている。この老令賛美は、この詩に限らずブラウニングの一つの特徴ともなっている。コーエン〈J. M. Cohen〉は言っている。「ブラウニング自身『人生の終りあるはその初めあるがため』<sup>④</sup>を信じ、その終りを初めの成就として常に期待をかけていた」<sup>⑤</sup>また、「かれは他の浪漫派詩人と異り、青春の詩よりも老令の詩を若い頃から書き始めていた。それは、かれの切なる希いが、自らの成熟を急ぎ、『ポーリン』〈Pauline〉の未熟な気分を逸速く超越することにあつたからである。そのため彼の最も深遠な多くの詩は老令の口によって語られている」と<sup>⑦</sup>。

さて、上述の句はこの詩の中心思想をなすものである。人は老いても、一生の終りが来たと諦めるべきでなく、人生に終りあるは始めがあるためであり、始めの成就がその終りである。人生の最善は過ぎたのではなく、これから来るのである。故に尊い人間存在の自己を保って年取るべきである。人の一生は神の掌中にある。青春は人生の半ばにすぎず。青春既に過ぎ老境に入るも老いの凋落を歎くことはない。人は神を信じて、人生全体を見るべきである。これがこの句の意味であり、この詩の全体を貫く中心思想である。そして老令と青春を比較し、この思想を敷衍する。若い頃、人が享楽に耽るも、純潔を保つも、理想を追うも、それぞれ人生にとって大切である。しかし、これをなすに当って経験する不安、懊悩のすべてを懐疑精神で眺め、人生の意義を見極める瞑想をなし、沈思し、人生を深く生くべきであると言う。また若い頃、人がただ歓楽を求め、飲食するのみならば禽獣に等しい。それは餌袋をただ満たすにすぎない禽獣には懐疑の心がなくからである。禽獣に等しい人間は客体的存在の人間である。主体的人間は懐疑の心を以って深く人生に思いを致すべきである。人が懐疑の心を以って万象を眺めるとき、ここに

一閃光に心動かされ、永遠の生命に繋がる自覚が得られる。この自覚を得ると、人生のいかなる障害、苦痛、また失敗も問題ではない。失敗こそ却って成功への道である。自らが憧れて己まなかつたことの非実現は寧ろ慰めである。ただ努力し、魂の進歩發達に資すればよい。今の生活より低級のそれへと墮落せざればよしと不成功の成功を説く。次いで精神と肉体の問題に触れ、いずれも尊さに於いて甲乙なきを述べる。人がただ生物的な肉体のみを有し、その精神が、人の手足を動かすにすぎなければ、それは客体的な人間にすぎなく、獸に等しい。肉体がいかに強大でも、低級な物質世界に把われている限り、人は清い高い精神世界の道を進むことはできぬ。しかし一方、人はこの世に肉体をもって生れた以上、赤い血潮の漲る<sup>みなぎ</sup>肉体の享樂生活も満足すべきである。それは肉体も精神も共に神の創れるものなるが故である。肉体の樂しみにより、肉体も神の贈物なるに思いが到り、神の經綸の偉大さを悟り、神の愛の深さに感謝したき氣持となる。ここに肉体と精神は相容れないものでなく、両立するものであり、老令になってこれが完全に不自然でなくなる。かくして人ははじめて客体的な生物的な人間を脱して主体的な人間らしい人間となり、たとえ芽生えにすぎずとも、神に近い人間になると言う。次に老令は人生の憩の時機であると言う。人は老令に達すると、現世の戦が終り、来世の新しい戦に向う前の休息を求め過去を回想する。例えば若い頃の論争は結局わからずじまいであったなどと。そして今や憩の状態に入り、老境の静謐を得て、はじめて事の真相が明瞭になると言う。しかしこの老境にあってもこの時機は世間との交渉を絶ち切って孤高を保つといった状態になることなく、青春の頃の行為を判断し、広く人間の人格判断の目安を示す明知の時機であることを述べ、倫理的な多くの詩句を列べ老いの明知を説明する。そして結局、人間の価値は神のみが知ると言う。次いでこれと関係して、時は過ぎ去り一刻も止ることなく、万物は変化してやまぬ。しかし苟も存在するものは永久に存在する。地上の一切のものは変化しても、人間の魂と神は確かと立って動かない。人間の心に入ったものは過去にあり、現在にあり、未来にもある。かりに時の経過が止ることがあっても、神と神によって創られ、永遠の生命に繋がる人間は永久に存在するという深い感銘を与える言葉を發するのである。そして最後に人生の目的は神の栄光を現わすことであるという。以上のこの詩の思想を圧縮して言えば「生と死、時と永遠<sup>⑧</sup>」についての思索である。このブラウニングの思想は偉大である。人生論、宗教論としては立派なものである。しかし思想が偉大であり、人生論、宗教論が立派であっても、それがブラウニングの詩人としての偉大性を直ちに示すものではない。然らばこの詩がかれの詩人としての偉大性を示すのはいかなる点であろうか。

(三) 情緒・知性・芸術的理性及び懷疑精神

(1) 哀愁の情緒

作品が作品として文学的価値があるかどうかは、その作品の内面的要素の情緒、知情、芸術的理性がその役割を果しているかどうかにかかっている。ブラウニングのこの詩の思想は、詩の内面的要素としての知性である。情緒は、情緒それ自体としては作品に姿を現わさず知性に滲透しているにすぎない。然らばブラウニングの知性に情緒が果して滲透しているであろうか。そしてその情緒はどんな情緒であろうか。さて、老いの凋落にある人は、その凋落は人間として避け得ない運命、人間の今も昔も未来に於いても変わることはない宿命と考え、老いの生活を無意味なもの、味気ないものと感じるものである。この老いの凋落の歎きにある人の心情がブラウニングの人間愛を揺り動かし、これがこの詩創作の動機となったのである。その頃、かれは齡五十才前後、しかも人に勝れて強壯、知力も旺盛で、まだ老いの凋落期には入っていなかった。しかしかれは人一倍感受性が強く、万人の心を知るに敏であって、老いの凋落の歎きという人間の宿命を充分すぎる程感じていた。また、一八六一年、自らの身も心も焼き尽して愛した妻エリザベス〈Elizabeth Barrett Browning〉の昇天という悲しみに直面し、深刻な人生悲劇を身をもって経験することとなり、その悲哀とそれとの闘いの苦しみを切り貫けんと「アプト・ヴォーグラー」〈Abt Vogler〉或は「前を望め」〈Prospect〉を著わし慰安を求めていたときであった。従って老いの凋落の歎きというすべての人間の哀愁に心動くのは当然であった。そこで自らの悲哀とその悲哀克服の激しい苦闘の慰安を求めると同時に、老いの凋落の歎きの人を慰める意図を以ってこの詩をものにしたものと思う。そして〔二〕に引用した詩句を以って、自らの心にも言いよかせながら、この詩を始めたのであった。この句は既に述べたように偉大な発言である。しかし老いの凋落にある人にとっては、現実には老いの凋落期にない人即ちブラウニングのこの発言に接しても、その歎きを消散するには、その歎きは余りにも深い人間の悲しみである。かれらにとっては、この慰めの発言は一瞬の慰めに終るものである。強いて言えば、言葉にならない冷笑的に表現される一種の諦めの救いがあるにすぎぬであろう。次の瞬間、またしても衰え行く老いの凋落の現実に戻り、若者の可能性に思いを致し、老いてはなし得ない種々のことに歎きを深くするのである。即ち若い頃、自らも高く理想を掲げ夢を追いしこと、歎業にわれを忘れしことなどを回想する。今、それらは既に過去となり、その心も老い衰え、理想も夢想も追うに由なく、身も弱り果てては歎業に耽る術

もなしと青春を追想し、歎きは相変らずそのまま残るのである。この心情を

「賜物<sup>⑧</sup>その恵みを空しくすべきにあらず、御身らの過去は、青春の力、あらゆる所に満ち溢れ、あらゆる面に完全なりき。

目と耳、その分前を取り入れ、脳はそのすべてを秘蔵しいたり。心臓一度鼓動し、『生き且つ学ぶはいかによきかな』と言いしことうべなるかな<sup>⑩</sup>」

とブラウニングは老令の人の青春回想を当然とし、今は返らぬ青春への郷愁なる老令の哀愁の情緒に自らも打たれるのである。

(2) 媒材としての倫理及び宗教Ⅱ知性

人生の生業<sup>なりわい</sup>に失敗し、楽しみよりも苦しみの多くを重ね来た老いの人達には、凋落の歎きはひと際深いものであり、苦しみが大であればある程、絶望感<sup>⑨</sup>は激しく、失望の淵に沈淪するものである。この心情を察してブラウニングは言うのである。

「さらば、われ迎え入れん、世の円滑を妨げる<sup>さまた</sup>阻害のすべてを、坐らせず、立たせず、ただ行かしめる刺戟のすべてを。

わが喜びの四分の三は苦しみにてあれ、努めよ、緊張を無視するなかれ、学びて苦を数うるることなかれ、敢えて言わん、痛み<sup>つぶや</sup>噛くことなかれ。

そは嘲笑と見ゆれども、失敗と思える所、其処よりぞ、人生成功の逆説来る。

われ、憧れしものの実現せざること寧ろ慰め、われ、若し努力せざれば獣たらんもよし、墮落せんことを願わざるのみ<sup>⑪</sup>」

「されど、われ、かのときと同じく、今も人を創り給いし御神を必要とす。  
輻輳の廻転最も激しく、艱苦に悩めるときすら、遅速<sup>ちそく</sup>千変万化、目も眩<sup>くら</sup>むばかりに廻転する輻輳に繋がれ、前後の区別だになくなりしと  
きすら、主の渴を満足せしめ奉るわが目的を没することなかりし故に。

されば御神の創り給いし盃なるわれを用い給え、潜みいる瑕、地質<sup>そ</sup>の反り、役にたたぬまでになりたる歪<sup>ひずみ</sup>を繕い給え、わが一生の御神の  
掌中<sup>⑫</sup>にあらんことを、御企てのごとくこの盃を全うし給え、老令には青春を認め、死には老令を完うし給え」

と。前者はブラウニング流の不成功の成功を説く倫理的な句であり、後者は絶望に瀕するものへの神の信仰を説く宗教的な句である。これらの句を読むとき、流石に倫理学者、信仰の人、また一世の指導者としてのブラウニングの人間像がまざまざと脳裏に浮ぶのである。そしてかれが

ロバート・ブラウニングの詩「ラバイ・ベネズラ」の文学的価値について

予言者的、哲人的態度で、時代の代表者、新しい黎明の声たらしとする抱負も読みとれるのである。これは確かにブラウニングの偉大性を示すものである。この故に、かれの信仰、倫理、思想に重きを置き、信仰の人、倫理思想家、人生哲学者としてのブラウニングを眺め、かれの詩人としての本質よりは、その信仰、霊性、楽天観の面を強調し、宗教詩人、人生詩人としてのみブラウニングを称揚する人が多いのである。そのためこの詩も人生論的、道德論的のみ取扱われる嫌いがある。勿論この詩を人生論的、道德論という文学以外の見地から見てもブラウニングの偉大性は充分認められる。しかしこの見地からのみみて、かれを称揚するのは、詩人としてかれを称賛することにはならない。といってもそれは、ブラウニングが媒材として道德、宗教、哲学を用いたことを非難してはならない。かれは他の詩に於いてもこれらの媒材を用い、その詩を寧ろ深みあるものにし、詩を芸術的に高いものにしてはいる。その適例が「指環と書物」〈The Ring and the Book〉である。しかしかれが詩に用いる媒材、即ちかれの知性を理解するだけでは詩人としてのかれを見逃すこととなる。かれを詩人として認めるには、その知性に透している情緒に触れなくてはならぬ。けれどもかれの多くの作品に於いては、知性が文学の内面的要素の一つとしての働きの媒材の役割以上に出て、情緒伝達の妨害をなし、詩人としてのかれの短所を暴露するのである。これはどこから来たのであろうか。かれはヴィクトリア朝に生れ、その盛時の反面に生じた欠点 snobbery, (俗物根性) respectability, (体面・世間体) phitsinism (げす根性、無教養) など所謂 Victorianism を極度に嫌い、これに抵抗したのである。⑩ また当時の道德、宗教の在り方にも不満を示し、⑪ そのため多くの詩の材料に、道德、宗教を用いて強い抵抗の意志を表明した。ところがこの抵抗の間に、いつしか予言者的、哲人的態度が生じ、時代の代表者、時代の指導者⑫ という自負をもつに到った。このこと自体は、かれも亦時代の子として、自らは知らずの間に Victorianism の影響を受ける結果となった。即ちかれは道德、宗教を詩の材料に過多と言えほど取り入れた。換言すれば、詩の創作の媒材として道德、宗教という知性が過多となり、詩の本質的要素の三つ情緒、知性、芸術的理性のバランスを崩すこととなり、知性が情緒の主動的立場を犯すこととなったのである。そのため詩の本質から逸脱する詩が生ずるに到ったのである。⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

き、これはかれを損うものとなっている。この詩に於いても道德、宗教を用いすぎた嫌いがある。そのため知性が過多となり、媒材としての役目を通りすぎている。その結果、知性に透過している情緒が読者に伝わり難くなっている。キング〈Roma A. King〉も言っている。「勿論、ブラウニングも必ずしも詩作に成功しているとは限らない。例えば『サウル』〈Saul〉『荒野の死』〈A Death in the Desert〉『ラバイ・ベ

『ネズラ』に於いては、詩人とは予言者の仕事を着実に果すものとするヴィクトリア朝の人々の期待と妥協している。そして自らこそ遠く将来を見通す役目を担うものと納っている。しかし実はただブラウニング協会に納っているにすぎないのである。そして上述の詩に於いても想念は詩的に動かず、性格の発展は見られず、またその衝突もなく、加うるに想念の情緒的、審美的表現は見られない」と。キングのこの言葉にわたくしは全面的には賛成しかねるものであるが、ブラウニングの欠点を突いていると思う。しかしわれわれはこの詩の言葉の意味即ちブラウニングの知性に煩わされることなく、それに滲透している情緒に触れるよう努力すれば、必ずわれわれの情感に触れるのである。それには媒材としての知性の理解に努力はするが、知性の情緒伝達の妨害排除に力むべきである。即ちかれが詩の各行に述べている倫理的、宗教的言葉は道徳の徳目、宗教の教条を理解する態度のみで接するのでなく、その言葉の奥に潜む倫理的、宗教的感情がわれわれの情感に触れるように力むべきである。

### (3) 高翔的情緒

この詩に倫理的な言葉の三つの次の句がある。

「仕事と呼ばれる俗悪な塊、人の目を引き報賞をもたらず仕事、これらによりて人の品定めすべきにあらず。

世の低き人達、高き立場ならぬ水平の立場にありて、その仕事の上に手を置き、即座に満足の意を現わし、<sup>また</sup>瞬く間に、仕事の価値を定む」<sup>⑩</sup>

「されど世の人の親指、人差し指の長さにては、粗雑なる計りとなりて計り難きもの、重大なる評価をなすに当りて見逃されるもの、行動に現われ出づるまでに熟せざる本能、実行に移すには不確実なる志、その人の仕事としては重きをなさず、ただその人物の<sup>しめだか</sup>高を<sup>か</sup>展らせるもの」<sup>⑪</sup>

「狭き行為の中に押し込め得ぬ想い、言語に表現せんとせば言葉を通るうちに逃げ去る空想、自らは望むも得ざりし理想、また憧れ、自らは具備すれど世人認めざりしもの、これらすべてこそ、その轆轤、この盆を創り給いし神に対するその人の価値」<sup>⑫</sup>

これら三つの句の最初のものだけを讀むときは、いかにも道徳の徳目を讀む感じがする。しかしこれを後者の二つの句と共に讀むときは、三つの句全体に滲透している情緒が感得される。その情緒とは、人間の価値を超自然的なものへの繋がりに於いて眺め、人間の地上的低級な、汚

ロバート・ブラウニングの詩「ラバイ・ベネズラ」の文学的価値について

ロバート・ブラウニングの詩「ライバイ・ベネズラ」の文学的価値について

れた場所から高い清い天上的なところに翔け上りたい希いの人間の心情即ち高翔的心情をあらわす倫理感である。ブラウニングが人間のこの情緒をここに表現したのは、かれが若い頃、師表と仰ぎ私淑したシェリー〈Percy Bysshe Shelley〉の影響があったと思う。シェリーが

「高く、高く、汝は翔け昇る。

火の雲のごとく、蒼空を飛翔する。

常に歌、歌いながら翔け昇る。

常に翔け昇りながら歌、歌う」<sup>④</sup>

と「雲雀に寄せて」〈To a Skylark〉の中で言っているのはこの高翔的情緒を伝えるものである。ブラウニングは「指環と書物」の中で、この情緒を次のように説明している。

「人の心は物質ならず、また、物質よりは来らず、天上より降り来るものなり。

さらば、人は物質を離れ、ただ心のみにて進むべし。

人の心は、天上にありて、認められたる心たるべし、卑しき心離れて、他人<sup>ひと</sup>を見るべし。

人は自ら思う程、高き程度に、強く、聡明に、また、善なるものにあらず、思いの外に低きものなり。

さらば、高きが上に、尚、高く、翔け昇れ、舞い上れ」<sup>⑤</sup>

と。かくブラウニングは人間の天上的憧憬の情緒を強調するのである。

#### (4) 煉獄性の人間と人生歓喜の情緒

ブラウニングの「司教ブラウグラムの弁明」〈Bishop Blougram's Apology〉の中に次の句がある。

「戦が人の心中に始まるときこそ、人には何かの価値があるというものだ。

神は頭上から見下ろし、悪魔は人の股の間から見上げる。両者が引っ張り合い、人はその真ん中に置かれる。

そのうち精神は目覚め成長する。人はこの戦を生涯つづけるべきだ。いや、来世までその成長をやめてはならぬ」<sup>⑥</sup>

これは人間の煉獄性を認めた句である。人間は地獄と天国の中間煉獄に立っているのである。そして地上に強く引っ張られるが、また天上も



強く憧れる。かくして肉体と精神の戦を繰り返し、結局は精神的成長をするというのである。この前者、即ち人間が地上に強く引っ張られる点についてブラウニングは「フラ・リポ・リビ」〈Fra Lippo Lippi〉の中で、

「この世は、わしらにとって汚れたものじゃない。また虚ろなものでもない。この世はとても意味の深いもの、とてもよいものじゃ。この意味を見つけないことがわしの飯であり、酒なのじゃ」

と、リビに言わせ、人生の生き甲斐あること、人生の喜びであることを歌っている。これは、ブラウニングが人間の地上的生活を全く汚れたものとか、意味のないものとは考えず、寧ろ人間にとって、大いに価値があると考えたことを示すものである。しかしブラウニングは人間の肉体と精神の関係を更に、

「肉体、その肉体に適わしき精神しか持ち得ず、精神、その肉体の腕、脚の活動に欠けることなきように働くのみならば、人、獣ならずして何なるや。

人の肉体、ただ肉体としていかに勝れたりとも、人の魂の孤高の道をいかばかり遠く進ましめ得るか。

人の品定めはこの鑑識もてなさんことを」

と言っている。人間が肉体的快楽を感じるのは人間の精神である。また反対に、人間が精神的快楽を求めるのは血と肉に満ちた肉体の人間である。肉体の立場から言えば、精神行為は感官によって束縛された心理現象であるが、精神の立場から言えば、肉体に属する感覚と雖も精神にその根柢を置いている。所詮、立場を換えての見方にすぎない。結局、人間の精神と肉体はぴったり一つになって分つことのできない存在物である。両者のうち、肉体に比重が傾けば獸性を帯びた客体的人間となり、比重が靈性に傾けば主体的人間となる。人間の価値は主体的人間にまで、人間が進歩するかどうかにかかるとブラウニングは考えたのである。しかしまた、

「それも、この肉体の生活が楽しき故なり。

わが魂は肉のバラ色の網細工に入れられ常に地上にひかれるため、その誘惑を克服せんと奮闘から常に休息を憧れる。

かるが故に、獸性の持てる数々のものに匹敵すべき貴重なもの、その最も多くを、わが魂のために保たんことを切に望む」

と、人間がこの世に生れたことを神に感謝するのは肉体の楽しみがあるためであると言う。しかし人間は肉体生活に耽りすぎ、精神生活を忘れ

勝ちである。精神生活を忘れないためには、度を越えた肉体生活の誘惑に勝たねばならない。ところが人間は常に獣性に圧倒され勝ちである。この故に、獣性に匹敵する霊性の力の増大を切望するものであるとブラウニングは言うのである。けれどもかれは再び言う。

「われ、今、このバラ色の肉の網細工に包まれおれど、われ、努力し、進み、概して進歩せり」と言うを望まず。

寧ろ朗らかに叫ばん、鳥空飛びて歌う如くに、「よきものはすべてわがもの、今、老令に到りて霊が肉を助ける如く、肉は霊を助くなり」

と。獣性よりも、霊性の増大を望んでも、禁欲主義者の、蔭で肉欲に耽りながら外面的には肉体を蔑視し、獣性克服に努力するとの態度を排し、明らさまに獣性と霊性の両立を主張するのである。これはホイットマン〈Walt Whitman〉と通じる考えである。ホイットマンに次の句がある。

「わたくしは肉体の詩人であると同時に靈魂の詩人である。

天国の歎喜はわたくしと共にあり、地獄の苦悩もわたくしと共にあり」

と。ホイットマンのこの言葉は、「草の葉」〈Leaves of Grass〉の根本思想、即ち自己は宇宙のどこにも遍在する、宇宙の一切が自己であるの思想に根ざしている。ホイットマンは自然の前に立つと、素っ裸の人間の姿で自然と融合し、内在的な深い関係を感じたのであった。ブラウニングも、内在的関係を感じていたが故に、神の賜物としての肉体の楽しみを認めたのである。故にホイットマンが一切の人為的な文明の衣裳をかなぐり捨てて赤裸々な本源的な肉体的生活の楽しみを認めたのと軌を一にするものであって、いずれも人生の喜びであることを主張するのである。ブラウニングは「フラ・リップ・リピ」の中で更に言っている。

「わしはね——、教えられた通りに話すつもりじゃ。

わしはいつもエデンの園と人間の妻をお創りになった神さまが目に見えぬのじゃ。

わしは一度覚えたからには肉の値打とその味は十分〈ten minutes〉やそこいらでは忘れられんのじゃ」

と。かく考え来ると、この章で引用した上述の句(26)(29)(31)に滲透している情緒は人生喜びの情緒である。しかし所詮、人間は煉獄に立つが故に、人生の喜びの情緒に浸りながらも亦、永遠なものへの憧れをもつものである。従って人生の喜びの情緒は高翔的情緒へ、そしてまた、崇高

の情緒へと導かれ行くのである。

(5) 崇高の情緒

ここに崇高の情緒というのは、人間が無限なものへの憧れの過程、従って憧れの動的な面に重点を置いて眺めるとき、これを高翔的情緒と言ったに對し、憧れの対象に中心を置き、静的な面に重点を置いて眺めるとき、これを崇高の情緒と言いたいのである。この詩に次の二つの句がある。

「伏して地上を見ず、仰いで天上を見よかし。」

身を陶器師、神の手になる大盃なるを思い、神のお役にたつ術すべを考えよかし。

祝宴の食事は整いぬ。燭は耀ひびき、ラツパは響ひびく、新しき酒は泡噴はきて溢れ、盃はを捧たげし主の唇は紅に熱す。

汝、神の御用にたつべき完まき盃となりたる限り、地上の轆轤ろくろを何に用もちいん<sup>⑧</sup>」

「ああ、かの陶器師の轆轤を想え、この比喻を考えよかし。」

しかし何が故に時は速く廻り、われら土塊は徒らに動かうずして横よわるかを感じせよ。

酒盃一座に行き渡るとき、愚かなるもの汝に言葉向むけん。

『万物は流転し、人生は無常なり。過去は去り行きて追うに由なし、現在を把とえて享樂せんことを』と。

何たる愚言なるか、愚かなる者よ。

苟も存在するものは永久とわに存し、その存在を取り消し得ず。

地上の万物は変化すれど、汝の靈たまと神は確しかと立ちて動かうず。

汝に入りしものは過去にあり、現在にあり、未来にも存在せん。

時の轆轤は戻り止ることあれど、陶器師と土塊は永久とわに存ぞす<sup>⑨</sup>」

と。宗教的な句は倫理的な句よりも、その句に滲透する情緒を一層容易に伝えるものである。宗教の本質は有限な人間が自らの所有しない無限なものへの憧れである。前者の句は人間の神への憧れの情緒を巧みな比喻を用いて強く表現したものである。実に神を賛える素晴らしい比喻の

ロバト・ブラウニングの詩「ラバイ・ベネズラ」の文学的価値について

ロバート・ブラウニングの詩「ラバイ・ベネズラ」の文学的価値について

ため、宗教的な言葉でありながら教条的な感じのしないばかりか、神そのもののイメージが人間のおいを帯び、地上的な温感を伴い、しかも尚、超現実的なもの、無限なものへの憧れの情緒が、ブラウニング独特の強い表現によって文学的にされているのである。レイモンド〈William O. Raymond〉も「ブラウニングの心像の感覚は躍如として、また豊かで、決して飽き飽きとした退屈なものではない。スペンサー〈Edmund Spenser〉の眠気を催す感覚に耽るには余りに精力的である」と言い、また上述の詩句について「光と音と運動の三つの心像が『ラバイ・ベネズラ』なる詩の歓喜の終末に於いて互に結合され、ユダヤの聖者の哲理は想像の翼に乗って飛翔する」と、ブラウニングの文学的表現の巧みさを称賛している。後者の句は人間の魂の不朽と、その無限なもの、永遠なものとの生命との繋がりにあることを示す深遠な瞑想的な、しかも力強い言葉で表現した句である。この詩が「生と死、時と永遠」と言われるのはこの句があるためである。老いの凋落の歎きにある人が、その凋落を生きとし生けるものの避け得ない宿命との哀感の淵に沈み、そしてその哀感が深ければ深い程、この句は、この人の心の琴線に触れることしばしばであろう。そこでこの人はこの句を繰り返し読み、自らも瞑想し、黙想するうちに、その琴線は徐々に振動を激しくし、その振動が最高潮に達するとき、この世に生を享けた喜びに、その胸は高鳴りを覚え、

「われ、わが心臓鼓動し言うを覚ゆ、

『ほむべきかな神の御業、われ見たり経綸のすべてを。』

御力を見たるわれ、愛の完きを見たり、完きかな、神の経綸。

謝すべきかな、われ人と生れし、

創造主、われを創りかえ給う完きものへ、

われ信ず、御心のなし給うところを』<sup>⑩</sup>

と神を賛え、崇高の情緒に浸るのである。かくしてその老令の人は、今まで沈淪していた哀感の彼方に永遠の生命を憧れ、現実のぢかの人間の条件を超え、今と此処の時空を超えて、一切のものを見る心の窓を開き、

「夕の張垂れんとするとき、一瞬が、その日の行為の区切りつけ、薄暮れの空に、華やかなる夕映呼び入れぬ。

日輪將に没せんとする彼岸より、静寂の囁き響きて、<sup>⑪</sup>

『過ぎし日に今日を加えよ、過去にこの一日を加え、その価値定めよ、ここに一日また終りしかば』<sup>④</sup>の境地に達するのである。実に崇高の情緒の静謐こそ、この詩の情緒の最高のものである。この詩の主動的、中心的、最終的情緒はこの崇高の情緒の静謐である。老境を一日の夕にことよせて、老境の静謐を象徴的に述べ、「静寂の囁き響きて」とブラウニングはいとも巧みに表現しているのである。

#### (6) 懷疑精神

哀愁の情緒は人生の喜びの情緒を経て高翔の情緒となり、崇高の情緒へと展開するのであるが、ブラウニングはただ無批判に何かに縋るか、永遠の生命に盲目的に憧れることを説くのではなかった。かれが哀愁の情緒から崇高の情緒に到るには、そこに懷疑精神が働くのであった。この詩に次の句がある。

「人もし飲宴を求め、見出し、むさぼりて、ただ飲食するのみに創られしものならば、人生を誇ること、何たる憫むべき高言なるか。かかる宴樂の終るとき、鳥獸と等しく、人にも終りあらん」<sup>④</sup>

食物、餌袋に満てる鳥、愁にその疲れを覚えることやある。胃袋、餌の満てる獸に、疑、その心をいらだたすことやある」<sup>④</sup>

と。この句はヴィクトリア朝の人々の物質的繁榮に満足し、勃興せる科学の発展に伴う世相の推移、信仰の動揺などに無関心で、これらについて一片の疑の心なき人々に対する抗議の発言である。ここにブラウニングの疑の心とは当時の科学精神をかれが認めていたことに連なるものである。これがやがて世紀末から今日までの文学の底流となっている懷疑的基調にも通ずるものであり、従って近代的哀愁の情緒、その他種々の情緒に尾をひくものである。ヴィクトリア朝の科学の勃興に伴う科学精神はブラウニングの心に影響せざるを得なかった。例えば「パラセルサス」〔Paracelsus〕の中の次の句には進化論の影響が見られるのである。

「神はかように万物の裡に在します。

生命の最も微細なる始めのものよりして人間となれるものに到るまで」<sup>④</sup>

と。かくブラウニングは、かれの思想に科学の影響を受けたばかりでなく、それが詩作、特に取材の上にも現われ、積極的に科学そのものを題材として詩に歌い込んでいる。即ちかれは生物学、解剖学、化学、光学、化学実験室等近代科学の所産を詩に取り入れている。そしてこれらの

ロバート・ブラウニングの詩「ラバイ・ベネのズラ」文学的価値について

題材は、単にかれの詩に取り入れただけでなく、それが正確な知識となつてゐる。それはかれが対象を観察する際、極めて精緻正確であつたからである。この観察の精緻正確が表現の正確さをもたらし、ここから解剖、批判のかれの精神が生じ、かれ独特の詩の心理描写となつて行くのであつた。かくしてかれは斬新な題材として、新興科学を詩化したのであるが、ここに特に挙げるべきは、科学が先づ疑い、然るのちに、その疑から物の真相を究めようという所謂科学的方法をブラウニングが認めていたことである。これが出発点となつて、進化論を理解し、ついで世相万般の事象に懐懐精神をもつて向うこととなつたのである。かれは信仰の詩人と言われるが、かれの信仰は先づ懐疑から始つてゐる。かれは「司教ブラウングラムの弁明」の随所に、信仰には疑惑の必要であることを述べるのであるが、その例として次の二つの句がある。

「君は信仰を求めている。

わしは信仰の存在を証明するために、疑惑を示す。疑惑が深ければ、それだけ信仰が深いとわしは言いたい」

「要するに、そうだ、わしの疑惑は大きい、わしの信仰はもっと大きい。それでわしの信仰は充分である」

と。かれは広く宇宙、人生に想いを致すときにもこの懐疑精神をもつて立ち向うのであつた。故にかれはこの詩で言うのである。

「われ老令の歎きを禁ずるは、若き人々の『いづれの薔薇をわがものとせん、いづれの百合花を残し置き最善と呼ばんか』と煩悶することを難ずるがためならず。

また、若き人人、星を称え『われの望むは木星ならず、火星ならず、あらゆる星の特徴をまざり持ち、しかもすべての星を超越するわが心に描ける星なり』と憧れることにもあらず。

これらの煩悶、憧憬は短き青春を効なきものにすると、われ青春を難ずとせば、そはまとはづれも甚だしきことぞ。

寧ろわれの抗議するは、完成されながら有限にして、土塊に等しき若者たちの一閃光にも心動かぬ疑の心なきことなり」

と。これは直接には、若者を難ずる言葉であるが、間接には、一般の人人、特に老令の人に呼びかけたものである。故に老いの凋落という哀感に沈淪するも、疑の心を以つて深く冥想するうちには、無限の世界からの一閃光が心眼に映じ、崇高の情緒へと導かれ、「静寂の囁き響き」来ることを示すものである。

主題の「ラバイ・ベネズラ」はユダヤの教師 *Rabbi* のことである。ベネズラは十一世紀頃スペインのトレド *Toledo* に生れ、スペイン系ユダヤ人の教師としてユダヤ人の間に有徳の人として尊敬されていた。また哲学者、天文学者、医師、詩人としても有名であり、旧約聖書の註釈家として聖書の科学的研究の開祖とも考えられていた。その思想の根本的なものは人間の魂の第一階梯の完成されるのは現世に於いてであり、その第一階梯の完成の絶頂は人生の青春のときでなく、寧ろ老令のときであると考えていた。これは(二)で述べたブラウニングの思想と同じである。ブラウニングは自らと同じ思想の持主のこの史上の人物ベネズラを把え、この詩の主題とし、登場人物として共通の思想を語らせたのであった。この詩は一八六四年出版の「登場人物」 *Dramatis Personae* に発表されたものである。ブラウニングの多くの詩は、これの劇的性格から生れた *dramatic monologue* の形をとっているが、この詩は厳密な意味では *dramatic monologue* ではなく *soliloquy* である。ワード *Maise Ward* も言っている。「『ラバイ・ベネズラ』は生と死、時と永遠についての詩である。しかし殆んど劇的独白ではない」と。けれどもブラウニングの劇的性格から同じく *persona* による手法を用い、しかもそれを史上の人物ベネズラを登場させて語らせるところは、自己の心情を客観化し、その普遍化を計ったのである。また、詩が詩であるための重要なことは普遍性の有無である。ブラウニングは詩人として詩の普遍性を重視したが故に、個を通して普遍を見る詩人であった。そこで個としての自己の心情を表現する際、普遍化をより効果的にするため、自己の心情を自己から離し、自己と自己の心情との間に距離を置いたのであった。第一には現在を離れ、遠く十一世紀に溯り、自己の心情と相似た心情を持つ史上の人物ベネズラを把えたのである。第二には、自己は一言も言わず、一つの決められた役割 *persona* を演ずること即ち登場人物ベネズラに自己の心情を語らせ、具象性から普遍性へという劇的特質による普遍化の工夫をするのであった。この詩が *persona* を演ずる詩を集めた「登場人物」と名づけた詩集に発表されたのはこれがためである。ここにいうブラウニングの心情とは(三)の(1)で述べたようにかれがこの詩創作に際して持っていた老いの涸落の歎きという哀愁の情緒及びこれが人生歓喜の情緒及び高翔的情緒を経て崇高の情緒へと高められ行く心情のことである。かれのこの心情と同じく、哀愁の情緒から崇高の情緒へとその心情が高められ、永遠の生命を憶れたベネズラに近親感を覚え、この教師に自己の心情を托し、自己を含めすべての人間の哀愁、それが高められた崇高の情緒、それらの関連に於ける全人生についての想念が表現されたのがこの詩である。故に老いの涸落の歎きにある老令の人が人生諦め哀愁に閉ざされ、やがては何か偉大な力に縛るしか道なき境地に追いやられているとき、この詩に接すれば、同じく近親感を覚え、人間の絆によってベネズラ、従ってブラウニングに結ば

ロバート・ブラウニングの詩「ラバイ・ベネズラ」の文学的価値について

れ、ここに個人的孤独感から普遍的なそれへと導かれ行くのである。かくして崇高の情緒を主動的立場に置いたこの詩の普遍化が、現在と此処の時空を超えて行われることになるのである。更に附言すべきは、ブラウニングは多くの詩に於いて、かれが心中にもつ究極的な情緒をその主題に渗透させる手法を用いることである。劇詩「ピッパは過ぎ行く」〈Pippa Passes〉はその適例である<sup>⑤</sup>。そしてその情緒が詩全体の統一をしているのである。「ラバイ・ベネズラ」のこの詩は、道德、宗教などの媒材即ちブラウニングの知性が複雑に錯綜し、その知性に渗透している種々の情緒が一見無秩序の状態に存在するかに見えるが、終局に於いては永遠の生命への憧れという崇高の情緒が主動的役割を果し統一しているのである。それ故ブラウニングは、この詩の主題を崇高の情緒の具現者ベネズラという史上の人物をもってするが適切と考えたのである。その結果、ベネズラがこの詩全体を統一すると同時に、この詩の普遍化を行なうこととなっているのである。

#### 四 結 び

かくして、この詩は文学の内面的要素の知性がその役割以上にでていることはいなめないにしても、芸術的理性がその欠点を償い、普遍性の表現と情緒の統一を完うし、主動的崇高の情緒を充分に伝えているため、文学的価値は高いものと言えるのである。アーサー・シモンズ〈Arthur Symons〉は言っている。「ラバイ・ベネズラ」に於いて、ブラウニングは自らの宗教的哲理を不変の美の形式に結晶したのである。これが近代宗教詩の中で最も崇高なものであると言われるのも尤もである。内容に於いて、また形式に於いて、瞑想詩の最高に属するであろう。そしてそれはブラウニングの作品に見られる厳肅な美、厳しい抑制、真面目な、しかも適切な情熱という独特の特質を殆んど具有しているものである<sup>⑥</sup>」<sup>⑦</sup>。

#### 〔註〕

- ① 表面的には道德論、宗教論を述べた記述にすぎなく思えるものであるが内面的には生と死、時と永遠の深遠な詩となっている。
- ② Florence Emily Hardy: *The Life of Thomas Hardy, Part VIII*, pp. 445—446
- ③ Robert Browning: *Rabbi ben Ezra, st. 1*
- ④ 上述の詩句中の語





- ②⑨ *ibid.* : Fra Lippo Lippi の中で、人生の喜びを重視する Lippi がカルミネ修道院の院長及び他の僧侶について、その禁欲主義的偽善を揶揄しているのがその例。
- ③③ Walt Whitman : *Song of Myself*, st. 21
- ③④ Robert Browning : *Fra Lippo Lippi*, ll. 265—269
- ③⑤ *ibid.* : Rabbi ben Ezra, st. 30
- ③⑥ *ibid.*, st. 26—27
- ③⑦ William O. Raymond : *The Infinite Moment*, p. 12
- ③⑧ *ibid.*, 13
- ③⑨ 註⑥⑥参照
- ④⑩ Robert Browning : *Rabbi ben Ezra*, st. 10
- ④⑪ 永遠の生命の声なき声
- ④⑫ Robert Browning : *Rabbi ben Ezra*, st. 16
- ④⑬ 永遠の生命を感得し、人間存在の意義を把握した主体的人間に対し、それらの意義に無知な客体的存在としての単なる生物的人間のこと。
- ④⑭ Robert Browning : *Rabbi ben Ezra*, st. 4
- ④⑮ *ibid.* : *Paracelsus*, Book V, ll. 682—684
- ④⑯ ㉑ 生物学——*Cleon*, ll. 190—230 に生物学の知識に触れている。
- ㉒ 解剖学——*Tray*, l. 43 に *vivisection* (生体解剖) の語を用いている。
- ㉓ 化学——*Cleon*, ll. 107—108 で、空気は本質的に水の三倍ものものを微妙な元素に溶解すると言っている。
- ㉔ 光学——*Christmas Eve and Easter Day*, l. 1150 に *prizm* の語がある。
- ㉕ その他 *Bishop Blougram's Apology* ll. 679—680 に *cosmology* (宇宙学) *geology* (地質学) *ethnology* (人類学) の語を用い、また、*Paracelsus* にも地質学、採鉱、亜鉛、蒼鉛、水銀、アンチモンの語を用い、薬学、生理学、病理学に触れている。
- ④⑰ *Paracelsus*, Book I, ll. 39—48 に、こうろぎ、とかげ、くも、毛虫の精緻な描写があるのはこの例である。
- ④⑱ Robert Browning : *Bishop Blougram's Apology*, ll. 601—603
- ④⑲ *ibid.*, ll. 724—725
- ⑤⑩ 享樂をあらわす。
- ⑤⑪ 純潔をあらわす。
- ⑤⑫ 理想をあらわす。

- ⑤③ ひとかどの教養はあるが、人生の有限を感得せず、ただ血と肉の動物的存在の人。
- ⑤④ 永遠の生命の閃き。
- ⑤⑤ Robert Browning : Rabbi ben Ezra, st. 2—3
- ⑤⑥ Maise Ward : Robert Browning and his World, p. 15
- ⑤⑦ 登場人物或は俳優のかぶるかつらの意。
- ⑤⑧ 大手前女子大学論集第六号「ロバート・ブラウニングの劇詩『ピパは過ぎ行く』の芸術的均整美について」の(四)参照
- ⑤⑨ Arthur Symons : An Introduction to the Study of Robert Browning, p. 147

参考文献

- 1. William O. Raymond : The Infinite Moment
- 2. Roma J. King, Jr. : The Bow and the Lyre
- 3. J. M. Cohen : Robert Browning
- 4. Maise Ward : Robert Browning and his World
- 5. Arthur Symons : An Introduction to the Study of Robert Browning
- 6. Clarence Tray : Browning's Mind and Art
- 7. F. R. G. Duckworth : Browning, Background and Conflict
- 8. C. Porter and H. A. Clarke : Browning, Men and Women, In a Balcony, Dramatis Personae
- 9.                               ibid. : Pauline and Paracelsus
- 10. Kenji Ishida and Rinshiro Ishikawa : Men and Women
- 11. Thomas Hutchinson : The Complete Poetical Works of Percy Bysshe Shelley
- 12. Everyman's Library : Leaves of Grass by Walt Whitman
- 13. Florence Emily : The Life of Thomas Hardy
- 14. 斎藤勇 : 英詩鑑賞